

研究・調査報告書

報告書番号	担当
38	滋賀医科大学福祉保健医学講座
題名 (原題/訳) Modifiable risk factors as predictors of all-cause mortality: the roles of genetics and childhood environment. 総死亡を予測できる因子のなかで修飾可能な危険因子: 遺伝の役割と小児期における環境因子	
執筆者 Urho M. Kujala, Jikko Kaprio, Markku Koskenvuo	
掲載誌 (番号又は発行年月日) American Journal of Epidemiology 156:985-993, 2002.	
キーワード 飲酒、運動、遺伝子、死亡率、危険因子、喫煙、双子	
要 旨 <p>研究者らは、死亡をもたらす危険因子の家族内集積と実際の死亡との関連をフィンランドの双子研究において明らかにした。このコホートは、1981年の時点で健康な24歳から60歳の15,904人を対象としており、また、1975-81年における質問票に回答した対象者である。追跡は、2000年6月30日まで実施された。</p> <p>その結果、個人ごとの分析では、性、年齢を調整した総死亡率は、余暇における強い身体活動のない者、喫煙者、多量飲酒（5本のビール、または、ボトル1本のワイン、あるいは、ボトル半本のスピリッツを飲む）者において、そうでない者よりも高かった。この研究には、3,551対の2卵生同質性の双子、1,772対の同質性の1卵生双生児を含んでいた。2卵生双生児を対象とした分析でも同様の結果であった。また、1卵生双生児では、喫煙がリスクの相違をもたらした。研究者の結論は、小児期における環境要因を補正しても、余暇における身体活動、喫煙、多量飲酒が総死亡率と関連していると考えた。しかし、身体活動や多量飲酒も遺伝的素因とは無関係でない面があると考えた。</p>	